

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(16)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月28日に行われたケルン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Kölnische Rundschau

March 2, 2020

Matthias Corvin

明確な構成をめぐる懸命な取り組み

ケルン・フィルハーモニーにおけるパーヴォ・ヤルヴィとソル・ガベッタ

ケルン・フィルハーモニーの「傑出したコンサート」では会場の三分の一が空席であったとはいえ、聴衆は感動していた。70分に及ぶブルックナーが終わった瞬間、東京のNHK交響楽団は拍手の嵐に包まれていた。2015年からエストニア出身のパーヴォ・ヤルヴィが首席指揮者である。彼は無論、魔術的な魅力を持ったかつてのギュンター・ヴァントやセルジュ・チェリビダッケのようなブルックナーの解釈者ではない。彼にとって重要なのは明確な構成だ。しかしながら、冷静さと光輝く音が繰り返し演奏で結合する。日本から来訪した演奏家達が、ブルックナーの《交響曲 第7番》を奏でる精確さは見事である。ホルンとこの作品で加わったワーグナーチューバの音色は素晴らしく、そして柔らかかった。弦楽器奏者はあらゆる箇所で絹のような輝きを放つ。力強く押し寄せる音色を、ヤルヴィは巧妙に演出し、絶えず音量を調整した。神秘的なものが時として欠けていたとは言え、ともかく全てが上手く調和していた。当然のことながら来訪した音楽家たちが故郷から持参したものもあった。この夜、冒頭では日本の作曲家である武満徹の短いオーケストラ曲《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》(1991)が演奏された。静寂で旋回するかのような音楽作品に、高音のフルートの音色とデリケートな打楽器がアクセントをつける。因みに、この瞑想的な導入は休憩後のブルックナーの交響曲に最適だった。

しかしながら、プログラムの真ん中は、アルゼンチンのソル・ガベッタによるシューマンの《チェロ協奏曲》であった。38歳の彼女は音楽シーンで存在感を示している。独奏場面では、最もエキサイティングといかないまでも、常に安定したおり、音楽における弦楽器の代弁者である。本公演でも柔らかな旋律に乗せて、第2楽章では歌曲のような感傷的とも言える

音色をゴフリラーのチェロから導き出す。

彼女にとって大切なのはこの曲における居心地の良さ、気取ることなく重苦しさをない演奏であった。この点では成功した。尤も、最初と最後の楽章は、もう少し強調とアクセントがあっても良かった。オーケストラの演奏もややライトなシューマンであった。アンコールでは彼女が好んで選ぶラトビアの作曲家ペテリス・ヴァスケスの《ドルチッシモ》をもって聴衆を完全に魅了した。

3月4日には、ソル・ガベッタはチェコ・フィルハーモニー管弦楽団と共にフィルハーモニーにおいてドヴォルザークの《チェロ協奏曲》を演奏する予定である。